

令和7年度 第1回インクルーシブ教育推進委員会 議事録

□開催日時：令和7年6月26日（木）14時00分～16時10分

□開催場所：バロー文化ホール 大会議室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸・中野正大・上田遥平・水戸志保・伊藤桂子・安田孔美・三尾葉子
鈴木由貴・岡 英樹・蜂谷 鋼・藤浪貴大（代理）・伊藤佳苗・大島由起子
- ・事務局：仙石 教育長・東山 副教育長・矢野 教育次長・立間 教育相談室指導主事
山中 教育相談室指導主事・前村 子ども家庭課総括主査・森本 福祉課主査
諸橋 保健センター保健師・長谷川 子ども家庭課障害児巡回支援専門員

1 挨拶

教育長挨拶

2 委員の委嘱

3 自己紹介（委員、事務局）

委員長、副委員長選出 委員長…伊藤(桂) 養正小学校長・副委員長…宇野 兵庫教育大大学院教授

4 報告・検討

（1）事務局より報告・説明

「インクルーシブ教育推進たじみプラン 第7期 2025年度 推進構想」に基づいて

＜重点項目＞① ユニバーサルデザインの授業づくりの推進(どの子にも「分かる」「できる」授業づくり)

② 全教職員の特別支援教育に関する理解と指導力の向上

③ スマイルブック（多治見市版プロフィールブック）を活用した理解と支援の共有

＜基本施策＞1 「一人一人の教育的ニーズの把握と、それに応じた指導・援助の充実」

・個の教育的ニーズに応じた適切な計画立案

・ICTの活用等、学び方に応じた支援の工夫 … デジタル教科書、iPad等の活用

・医療的ケアを要する園児、児童の受け入れ ・外国籍児童生徒支援員、相談員との連携

2 連続性のある「多様で柔軟な学びの場」の整備

・基礎的環境（ロジャー・パスアラウンドマイク、肢体不自由学級の設置）整備の充実

・キキョウスタッフの配置 ・通級指導教室

・交流及び共同学習、交流籍による交流の推進

3 教職員の専門性の向上を図る研修の充実

・全教職員の特別支援教育に関する理解と指導力の向上

・特別支援学級等担当教員の特別支援学校教員免許所有率

（2）意見交流

中野 委員：日本国籍で日本語指導の必要な子はどのような子か。中には学習障害のある子もいる可能性がある。日本では学習障害の子は数%と言われるが、外国では10～15%が常識。学習障害の知識のある支援員はいるか。

事務局：支援員も、日本語指導の必要な子に学習障害の可能性があることは認識。しかし、学習障害の知識は不十分であり、また、日本語指導と学習障害の支援のどちらが必要かの見極めも困難。今後学習障害に関わる研修を、支援員に対しても実施の予定。

中野 委員：ロジャー、パスアラウンドマイクは、難聴の子だけでなく、自閉症やADHD、学習障が

- いなどの、注意散漫で集中できなかつたり音が聞き分られなかつたりする子にも有効ではないか。そういった子への活用の試みはしているか。
- 事務局 : 補聴器に受信機をつけるタイプなので、通常の聞こえの子は補聴器を使っていないために個別に声をかけてはいるが、ロジャー、パスアラウンドマイクを活用するという発想がなかった。
- 中野委員 : 補聴器は音の大きさを自由に調節でき、選択的に先生の声拾って聞くようにできるはず。希望に応じて試してみてもどうか。検討してほしい。金額はどのぐらいか。
- 事務局 : 20万円ほど。
- 宇野委員 : 日本国籍で日本語指導の必要な子は、帰国子女でないか。
- 事務局 : 帰国子女もいるが、本人は日本国籍だが、保護者が外国人のため日本語で会話する家庭環境のない子など。
- 中野委員 : この委員会の成果もあり、多治見市の教員は発達障害等に対する理解が進んできたが、他市・他地区では関心や知識が不十分と感ずることがある。多治見市へ転入した先生を対象とする教育委員会の研修の機会はあるか。
- 安田委員 : 他市から転入した教員の、日々他の先生と共に働き、会話する中で「一人一人に寄り添うことの勉強ができる」という声もある。研修以外に、ケース会議等でも、特別支援教育の考え方や指導支援の方法を学び合うことができている。
- 中野委員 : 子どもに寄り添う気持ちのある教員は多いが、発達障害等の知識そのものが不十分な場合も少なくないために、見過ごされてしまうことがある。社会全体、学校全体で発達障害等に対する知識や関心をもつことが大切。システムとして学ぶ機会を作してほしい。
- 伊藤桂委員長 : どの教職員も特別支援教育に対する理解を深めて、子どもに接することが大切。
- 宇野委員 : 子どもの読み書きについて、担任等がなぜできないか等の疑問をもったとき、専門性をもった相談できる教員が校内にいとよい。市としては、特別支援教育コーディネーター等の教員の専門性を育てること。校内・園内では、気軽に相談できる時間や仕組みなど、風通しのよい体制を作ること。
- 岡 委員 : iPadの読み上げ機能を活用し始めたきっかけは、テストへの合理的配慮。カンニングのないよう約束も作成。iPhoneに同様の機能があるため、社会に出てからも活用できる。学習障害の診断のない子も、個別の支援計画の作成と医療受診の2点を条件に活用。
- 蜂谷委員 : 学校現場では、iPad等のデジタル機器やデジタル教材なしでは授業ができない程。資料の提示や配付などの活用が促進。授業準備の時間短縮にもなり、働き方改革にも効果的。教師用デジタル教科書の購入も多治見市独自と初めて知り、様々な支援に感謝。さらに有効な活用をめざしたい。子どもたちのデジタル教科書の有効な活用については、今後の課題。過去に肢体自由児を通常学級で担任した経験あり。接してみて初めて子どもの困り感がわかることも多くあり、寛容な保護者や様々な人の助けの中で指導・支援を行うことができた。今後も、子どもたち一人一人が「できた」「わかった」「学校が楽しい」と思えるようにしていきたい。

～ 休 憩 ～

(3) 事務局より報告・説明

「インクルーシブ教育推進たじみプラン 第7期 2025年度 推進構想」に基づいて

<基本施策> 4 就学先決定の仕組みと教育支援の充実

- ・専門家チームによる巡回相談
- ・ニーズに応える支援相談
- ・就労まで見据えた本人、保護者への情報提供

5 一貫した支援の取組

- ・スマイルブックについて
- ・引継会
- ・周知と活用のための取組

6 諸機関との連携強化

- ・SSWによる医療・保健センター・福祉との連携強化、支援への活用
- ・発達支援センターわかば　・発達相談（学齢期）の充実

（４）意見交流

大島委員　：我が子もスマイルブックを使っていたが、積み重ねや引継がうまくいかず悩んだときに、「この子育てが体験できることを楽しんで」というアドバイスが支えになった。その中でスマイルブックに挟んできた書類が、障害年金の申請（成長記録）に活用できた。小中学校時代だけでなく、将来にも役立つことを保護者も教員も認識し、充実した活用に生かしてほしい。

伊藤桂委員長：スマイルブックの活用が難しいのは何が原因だと思うか。

大島委員　：スマイルブックが始まった頃、先生もどう活用するかわからない状況で、何を挟めばよいかわからなかった。支援計画を挟むなど、先生と一緒に積み上げていくことができるとよかった。今は、療育手帳申請時の検査結果等も挟んでいる。

安田委員　：スマイルブックを、学校と保護者が「一緒に積み上げていく」スタンスで活用していきたい。園から小に上がるときだけでなく、保護者自ら新年度（小２）の担任に主体的にスマイルブックの引継を行った事例を紹介。

伊藤佳委員：我が子の年金申請の際に、これまでの記録をスマイルブックに残しておけばよかったと後悔。以前は、就学時に勉強会がなかったので、困ってもどうしてよいかわからず苦労したが、現在は多治見市の制度が整ってきたことをとても嬉しく思う。

三尾委員　：（校種や学年変わりの引継、懇談の際に）個別の支援計画とは別に、スマイルブックを有効活用するとよい。幼少期からつながっている点がよい。年間４０名の発達相談（WISC－Ⅴ検査）はどういう子が受けることができるか。

事務局　　：窓口は学校。（保護者の）希望によって申し込む。支援に役立てることを目的として実施。特性や支援のあり方を保護者と教員が共有するようにしている。

三尾委員　：検査結果を知ることだけでなく、フィードバックを大切にし、限られた予算を有効に活用できるとよい。

藤波委員　：当園では８３名中１７名がスマイルブックを所持。個別の支援計画等、様々な書類を残してもらうよう声かけしている。スマイルブックによって引継を一本化したことは、保護者にとっても職員にとっても有難く、個別の支援計画の作成時などにスマイルブックの紹介もし、推奨している。

鈴木委員　：中学校でも、スマイルブックの引継時にコピーをもらい支援計画の作成に生かしている。入学時だけでなく、学年が上がった際にも引継ができるようにしたい。

水戸委員　：スマイルブックについては、「わかば」での初回の面談時に、既に所持している人がほとんど。様々なところで紹介され浸透してきた。発達検査については、その結果を生かすことが難しい。最近は学齢期の子どもの相談も多く、検査結果からどんな配慮をすればよいかという保護者や学校からの相談がある。検査結果をどう活用するかが課題。

上田委員　：スマイルブックはアセスメントの手助けにもなりそう。福祉の立場からも活用を促していきたい。デジタル化・アプリ化など、よりアクセスしやすい方法を考えてはどうか。

宇野委員　：①学校教員の専門性の向上のために、外部の専門機関との連携が大切。検査の結果を生かし指導上の配慮を考えることは学校の役割だが、「特別支援教育士」の資格（日本LD学会関連）のある教員（多治見市には多い）を活用するとよい。人的リソースを発掘し、支援の充実につながることが大切。最近は、放課後等デイサービスなど、民間の療育や発達障害指導の広がりがある。その代表格「リタリコ」のプログラミング教育は、ASDに効果的。学校の中の支援は、デジタル教具などを自分でどう使うかを工夫する方向にシフトしている。文科省も、通級指導教室を自立活動の場と位置付けている。個別的なニーズに基づく

専門的な指導は、その方向に移行している。そのためにも連携が大切。

② i P a dや電子黒板の活用は、様々なニーズのある子どもの助けになっている。通級指導教室とタイアップしながら、自分が使い易いようにどうしたらよいかを学ぶことが大切。デジタル機器による情報や知識を頭に入れる「インプット」は充実してきたが、次は、デジタル機器を活用した思考・判断・表現の「アウトプット」の多様な手段を工夫したい。それを特別支援教育から発信できるとよい。（「アウトプット」の多様な手段を身に付けることは、）生涯学び続ける（＝自立）ために必要。それが、ウェルビーイングにもつながる。

【参考】三宅香帆氏『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（「新書大賞 2025」受賞）に、園から始まる学校教育を問い直すヒントがある。

③視覚化してインプットする、電子黒板のよい活用がなされている。今後、アウトプットにも役立てられる。学校で、教科のコンテンツの中でどう活用するかを工夫し合いたい。

【参考】芦屋市高島市長「公教育を変える…教師の主体性・自発性で、授業・学校を変える取組」

5 挨拶

副教育長挨拶